

民俗資料館だより

第15号 2008. 3. 31

発行 加茂市民俗資料館 電話 0256-52-0089
住所 加茂市大字加茂229-1 FAX 0256-52-0089

加茂市の文化財

加茂市の文化財は現在、加茂市指定の45件と新潟県指定の2件がありましたが、今年の3月25日に新たに新潟県指定文化財に2件が指定されましたので紹介いたします。

1. 木造伝元三大師坐像（加茂市若宮町・曹洞宗双壁寺）

元三大師とは、天台宗18世の座主の慈恵（じえ）大師のことで、災厄を祓うため、自らを夜叉と言ひ鏡に映ったその姿をお札にして、家々に配布したと言う。正月3日に入寂されたので、元三大師といわれた。

明治20年ころ、加茂町の人が古美術商から譲り受け、祀っていたもので、大正3年に双壁寺へ寄進された。

この像は鎌倉時代の終わり頃の作で、ヒノキの寄木造り、像高は91.5センチ。目は玉は嵌め込み、銅線を植毛して眉毛や髯をあらわす。なお、所々に補修されている。

像の姿は総髪の上に角を生やし、目は右上をにらみ、胸をはだけて、肋骨をあらわにして、左膝を立て、右手に剣を持ち、悪鬼を退散させる形相をしている。



2. 木造阿弥陀如来立像（加茂市上条・時宗西光寺）

西光寺は「加茂市歴史年表」によれば、1276年の創建と言われる。

本像は鎌倉時代中期の作で、ヒノキの寄木造で、通常より少し大きく像高113センチあり、鎌倉時代盛んに造立された来迎弥陀立像である。右手は胸の前で肘を曲げ指を上に向け、左手は下にたらししており、両手とも親指・人差し指で輪を作り、来迎印を結んでいる。

目は水晶を嵌め込み、衣は漆の上に金箔を貼り（剥げ落ちている）内部は空洞になっている。表現に誇張は無く彫り方などは穏やかである。

なお、脇侍の観音・勢至の両菩薩と台座・光背は後世の作である。



江戸俳諧師守村抱儀の加茂滞在

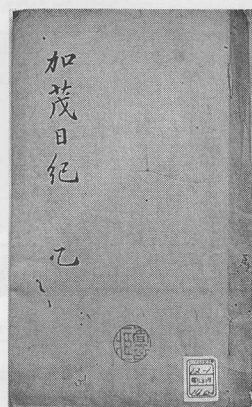
文化財調査審議会委員 関 正 平

嘉永元年（1848）11月19日、江戸の俳諧宗匠守村抱儀^{ほうぎ}が加茂にやってきた。江戸から直接来たのではなく、各地を巡っての到着であろう。冬が本格化する頃であった。

『俳諧人名辞典』による守村抱儀の事績は次のようである。「守村氏、名は約、字は希曾、通称次郎兵衛。また抱儀・小青軒・不知斎^{おうしよ}・鷗嶼^{ふださし}などの号がある。江戸蔵前の札差。俳諧を蒼虬^{そうきゅう}に、画を酒井抱一^{ほういつ}に、詩文を仏庵に学び、『墨林奇賞』『普陀落山房詩集』の著があり、天保二十四詩家の一人に数えられる。墨田に別墅^{べつしよ}を持ち十万の書物を蓄えていたといい、豪華な生活を営んだ。…俳諧護持者としての彼も、多年の豪奢生活がたたって晩年は家道衰え、俳諧で糊口することになり、駒形堂のほとりにささやかな真実庵を結んだという。文久2年（1862）1月16日没。年58。浅草永住町の竜福院に葬る。…『抱儀句集』は息永年と門人竹束が抱儀の俳句百九十余章を集めたもので、明治4年（1871）刊」。

抱儀が幕末の加茂町にきたことを記す史料は、蘭方医森田千庵家の「加茂日記」甲～丁の4冊で、長崎市シーボルト記念館に残っている。これにより滞在の概要を記してみたい。抱儀の加茂到着はすでに降雪も本格化した時期（太陽暦では12月下旬）である。抱儀はこの頃、札差と俳諧の豪奢な生活をしていた頃でなく、加茂での滞在期間が長期のことから俳諧で糊口をつないでいた頃とみられ、加茂に到るまで長岡や見附の俳諧人を訪ねた後と考えられる。到着の19日に真っ先に出迎えた人に中澤義珍^{よしちか}（上条村庄屋）や伊富^{いすう}がいるが、加茂へは到着日宿所の井轄^{せいかつ}とを含めて、抱儀は加茂での知己や伝手を頼りにやって来たのであろう。

抱儀の「加茂日記」乙
(長崎市シーボルト記念館)



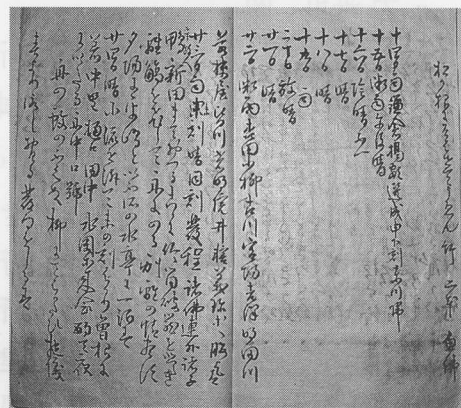
加茂での当初の滞在場所は井轄の屋敷であった。井轄のことは安政5年（1858）『俳家人銘録全』に、「加茂町鴨流舎井轄」とあるが、通称と居所はまだ不明である。抱儀はこの後、冬を過ごし夏に入る旧暦5月23日までの210日間、半年以上も加茂に滞在する。日記に加茂での居所を「新居」あるいは「庵」と記してあるので、井轄が自邸の一隅を空けて、そこを居所としたのだろうか。日記中に発句会が開かれた折々に、「選者庵主」とあることや、出来事がなかった日に、「庵中無事」とあることから、選者＝庵主＝抱儀としてみると、長期間の滞在看越して、井轄が庵と呼べるだけの亭を用意してくれたものと考えられる。

「加茂日記」には、その日の訪問者や出歩き先・秀逸句を記して、滞在の日々の様子がわかる。その訪問者をみると加茂・上条は勿論、水原・村松・見附・長岡、それに加茂滞在を聞き付けて越中や常陸など越後以外の同好者も訪ねて来たり、また抱儀に評を求める書信も江戸や各地から頻りに来ている。

加茂や上条・狭口・下条・後須田など周辺の来訪者や句会参加の俳名の数をみると、60名余にのぼる。また田上・村松・見附など加茂以外からの訪問者や寄せ句者では35名余を数える。これだけ多数の俳諧者がいたことをみると、いかにも幕末期、俳諧が隆盛していたかが窺

われ、その階層は庄屋や村々の重立ち層に広がって、教養の象徴のような様子が窺われる。加茂周辺でその主な人〈通称判明者は（ ）〉をみると次のようである。半仏（雛田中清＝松溪）、魚仏（森田専庵）・雲樵＝守古（森田千庵）の親子、春塘＝春堤（八幡屋小柳六右衛門）、凌再、歌考（島屋忠兵衛）、雪堂、鴨溪、山桂（市川氏）、荷龍（古川氏）、顔世（岩井可保世）、其仏、義晁（中澤喜平次）、狭口では清峽（笠原氏）・蘭斎（坪谷甚兵衛）、下条では竹家・竹溪親子（渡辺宇左衛門）、後須田で一兄、田上では永泉、原ヶ崎の泰年（小林源治）などで、半仏・魚仏・凌再・井轄・鴨溪・春塘などは句会の常連であった。

句会は「庵」と称した滞在中の抱儀の居所がほとんどであったが、到着の約1か月後には先ず魚仏亭（上町の森田家）、次いで翌年の3月には社家の古川荷龍亭やその近くの半仏亭、4月に上条新町の小柳春塘亭、閏4月に顔世亭へも行っている。なかでも初夏の4月23日には春塘亭で加茂祭「御祭礼神輿渡御」を拝している。また春の3月15日、上条八幡宮の祭礼に詣で、その帰路に狭口村庄屋の笠原清峽亭を訪ねている。特別な句会として閏4月16日「祖道会」という催しを俳名友慎の酔月楼で開いている。俳諧の祖師、芭蕉を追悼した句会か、ほかに書画会も併せて行っている。季節にあわせた外出もしており、春の3～4月にかけて4回の「山あさり」と記した蕨や山菜採りを、初夏の閏4月には「かじかをすなとる、味口よし」と、加茂川でのカジカ採りを楽しんでいる。滞在も終わりかけたころ、江戸宗匠ゆえに依頼されたのであろう、「鎌倉（新田）掲額選成」と鎌倉新田の俳額の撰を行ったことがわかる。



「加茂日記」丁の加茂を離れる部分の記録（嘉永二年五月二十三日）

加茂を去る前日の5月22日には、「森田・小柳・古川・宮坊（松溪）・吉沢・明田川・若狭屋・皆川・光明院・井轄・義珍等」に暇乞いに出かけ、翌日交友した諸氏20余人が加茂新田まで見送り、ここで別離の杯を交わして、舟で平島（新潟市）に向かっている。

抱儀の加茂滞在の概略を述べてみたが、その日数210日間、大小の発句会も記録だけで63回を数え、3～4日に一度の割合である。長期の滞在中であったからさぞ近隣に抱儀の書いた俳画や俳額も多いと思われるが、管見では意外に少ない。知られているのには大字狭口芦ノ出の日吉神社に俳画額がある。その画は遠景の山から流れる小川と、小山に咲く桜木が描かれて、「すこしつゝうこいて水の長閑なり、抱儀画」とある。「加茂日記」にはその外、興味ある記



守村抱儀の俳画（狭口芦ノ出 日吉神社）

載もある。嘉永元年11月25日に「江戸寺門静軒門下儒生来室」とあり、寺門静軒が加茂来訪する安政6年（1859）以前にすでに門人による来加がわかる。また抱儀の滞在中、見附の茶山と水原の春室の三人を選者に「加茂大明神奉納句合」と題した触れ紙（見附市山谷氏所蔵）も残り、奉納句会も開かれていた。加茂を去った後、また各地への旅は続いたのだろうか、13年後に没する。

民俗資料館平成19年度の歩み

1. 入館者数

平成19年4月

）

平成20年3月

	市内	市外	計	団体
大人	239名	446名	685名	3
小中学生	420名	69名	489名	15
計	659名	515名	1,174名	18

2. 資料収集の状況

本年度は1名の方から件4点のご寄贈を賜り御礼申上げ、紹介させていただきます。

〈寄贈品名〉

雪下駄・アシダ（雪用）・蛇の目傘・扇風機

〈寄贈者ご芳名〉

豊田屋様

3. レファレンス・サービス及びアンケート調査（民俗資料館への問合せ）

① レファレンス・サービス（52件）

- ・「加茂市八幡地内で化石が出てきたので調べて欲しい。」
- ・「幕末に加茂から福島へ養子に行った先祖午賜氏を調べたい。」
- ・「加茂市内の城館跡の名称及び所在地を知りたい。」
- ・「黒水地内に携帯電話の鉄塔を建てたいが埋蔵文化財包蔵地か。」
- ・「全国の資料館を巡っているが縄文時代の発掘品をよく調べたい。」
- ・「加茂市の道路原標を調べたい。」
- ・「文政11年の三条地震について知りたい。」
- ・「採取した土器片の鑑定をお願いしたい。」
- ・若宮中学二年生からの九つの質問
- ・近藤忠造先生の特別歴史講演会のレジュメを送って欲しい。
- ・加茂の桐箆笥の木くずなどから人形が作られているかどうか。江戸時代の木目込み人形は桐で作られていると聞いたが。等

② アンケート・調査・依頼（54件）

- ・遺跡台帳・市町村遺跡分布図の点検について（調査）
- ・埋蔵文化財発掘調査・整理作業について（調査）
- ・埋蔵文化財担当専門職員等状況調査
- ・2学年職場体験学習の依頼
- ・平成18年度博物館園活動調査
- ・出土品の文化財認定と県帰属文化財の保管に関する調査 等

4. 博物館実習

- ・11月19日～11月26日 新潟大学教育学部研究科 1名

5. 館 外 活 動

① 古文書講座

加茂山の静寂な雰囲気の中での古文書講座も25回を数えました。これからも毎年古文書講座を開いていきたいと思っています。

日 時 9月4日 9月11日 9月18日 9月25日 10月2日

各火曜日 午後7時～午後8時30分

会 場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室

講 師 加茂市文化財調査審議会委員

溝口 敏麿 関 正平 佐藤 賢次 長谷川 昭一 丸山 朝雄の各氏

参加者数 延べ183名

内 容

第1回 「幕末、加茂を綴った旅日記」

関 正平 氏

- ・曾根代官所下役が親鸞聖人ゆかりの名所・旧跡を巡る旅の途中、三条・下田を経由して長瀬神社・青海神社が式内社であるとか、加茂川の水が清らかな様子を短歌に讀んだりして、羽生田へ向かう。
- ・勤皇の志士・清河八郎が上方詣での途中で、加茂の町を通りすぎる。加茂の町の様子や加茂明神の彫刻が美しいとか、境内の杉が深々として自然と信心の心になるなどと書き残す。



第2回 「万延2年1月『加茂町一件留帳』を読む」

佐藤 賢次 氏

- ・百姓代の皆川良平が庄屋の市川正平次を17項目にわたって批判し、柏崎陣屋へ訴えたもの（内容は風聞や推測が多い）。この後、庄屋は置かれず、町年寄りの古川家が庄屋格を与えられて代行することになる。

第3回 「明治初年の大区小区会の論議」

溝口 敏麿 氏

- ・最近婚儀が華美に流れたり、また離婚も増えていることから媒酌人は節度を守るよう説得することや、県庁へ出頭する平民が羽織・袴を着用するので、節度を守るように言い、聞かねば警察へ届け出るとの会議の結論であった。

第4回 「明治初年の養子縁組の様相」

長谷川 昭一 氏

- ・明治5年の徴兵制は、一家の長・後継ぎや養子は兵役に服さなくて良いため、兵役逃れのための、絶家再興のための徴兵赦免願いをだしたり、息子を家長にする為の隠居願いや、妻の実家の養子にしたり、負傷のための徴兵赦免願い等があった。

第5回 「爲後世勸化帳（鵜鴛十王庵創建縁起）」

丸山 朝雄 氏

- ・宝永7年の創建から百年が経ち、十王像がたいへん傷んだので、修理のため、耕泰寺和尚や多くの人のお布施や労働奉仕によって像ばかりか建物までも修理が及んだ。

② 歴史講演会

『大でき加茂新田』のことわざの地である加茂新田が震源地である「悌助騒動」を新資料をもとに見なおします。

日 時 11月10日(土) 午後2時～午後4時

会 場 加茂市民体育館内 公民館 第4研修室

講 師 加茂市文化財調査審議会副委員長

溝口 敏磨 氏

演 題 「明治5年の大河津分水騒動」

参加者 58名



- ・時代が変わり、歴史についての考え方や新資料の発見等で明治5年に発生した大河津分水騒動（悌助騒動）の解釈が変わってくる。
- ・大正13年の資料によれば、新政府に対する不満分子が策動し、分水工事費の重い負担に不満を持つ愚昧な農民が巻き込まれた事件。
- ・昭和30年代には、分水開削反対一揆すなわち世直し一揆すなわち新政府反対一揆という視点へと変化する。
- ・最近の資料によれば、指導者の民衆からの支持や、集団の出発に当たり暴行の禁止等の決め事もあったが、入江・西潟の両人の率いる集団は、通った道筋が分水賛成派の庄屋が多く居たところでもあり、ついに暴発に至った事件と考えられる。

③ 特別歴史講演会

講師には新潟市文化財保護委員会の会長でもあり新潟県民俗学会常任理事でもある先生をお招きし民俗・芸能に関する初歩のお話をいただきました。

日 時 2月23日(土) 午後2時～午後4時45分

会 場 加茂文化会館 小ホール

講 師 新潟市文化財保護委員会 会長 近藤 忠造 氏

演 題 「民俗芸能への誘いー理解へのアプローチー」

参加者 54名

講演内容



- ・私が民俗芸能に興味を持ったきっかけは大学で国文学を専攻したが、中国の「全浙兵制付録」所載の記事と日本の民謡綾子舞の歌詞が全く同じであったことで、綾子舞は貴重な芸能とおもわれ、興味を持った。
- ・民俗芸能は祭りと密接な関係があり、神をお迎えし、宴を開いて、歌い踊るところから始まり、日本の風土の中で生きてきた日本人の信仰的な精神文化の表出であり、創作の手が加わった歌舞伎や日本舞踊とは違う。

加茂市の遺跡 平成19年遺跡発掘調査について

加茂市教育委員会社会教育課係長 伊藤 秀和

本年の遺跡調査は、開発事業に関連した確認調査が3地区、本調査が1事業により2遺跡を対象に行われた。

1. 荒又遺跡—古墳・古代—

所在地 加茂市大字下条地内

調査面積 約721㎡

調査期間 平成19年8月8日～9月12日

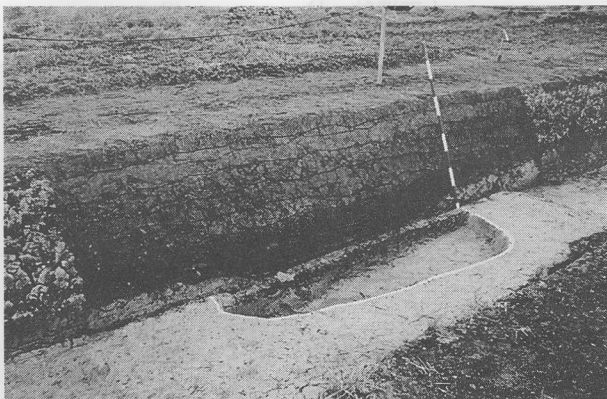
調査原因 吉津川地区県営ほ場整備事業

調査の概要 調査区はA区、B区とあり、上幅3mほどの細長い調査区を対象としている。

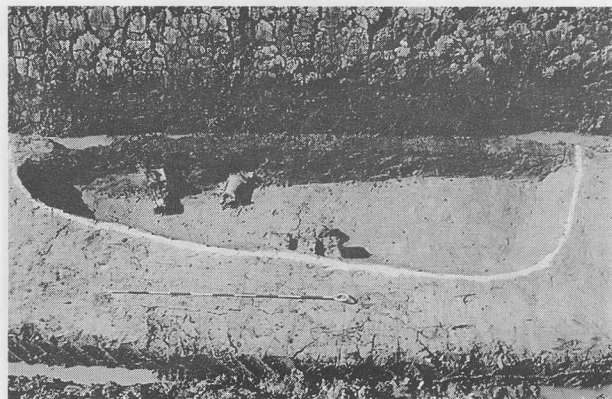


荒又・太田遺跡位置図 S = 1 / 50,000

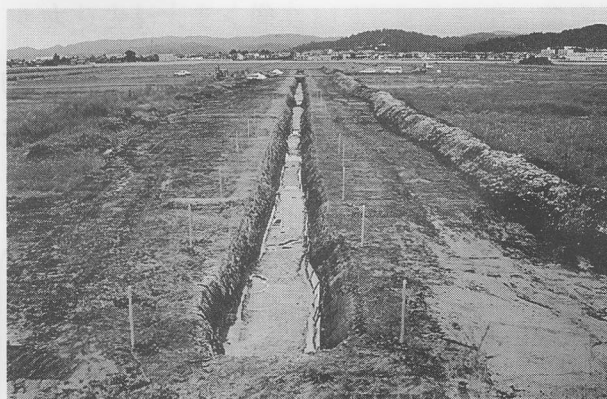
概ね現水田面下約1～1.2mの地層から遺構・遺物が出土した。A区では河川跡、土坑、溝、ピットなどの遺構とともに平安時代の土師器、須恵器が出土した。特別際立った出土品は見られないが、土坑から須恵器長頸瓶1個体が出土するなど、注目すべき点がある。なお、調査区東部では4世紀後半頃と見られる古墳時代前期の壺、甕などの古式土師器が出土した。背後の丘陵に存在する福島古墳群や宮ノ浦古墳（通称熊野山）との関連を考える上で貴重である。



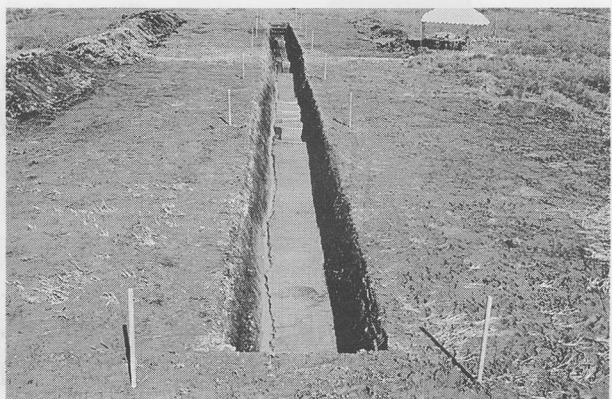
荒又遺跡 土層断面



荒又遺跡 土坑



荒又遺跡 完掘状況



荒又遺跡 完掘状況

2. 太田遺跡—古代—

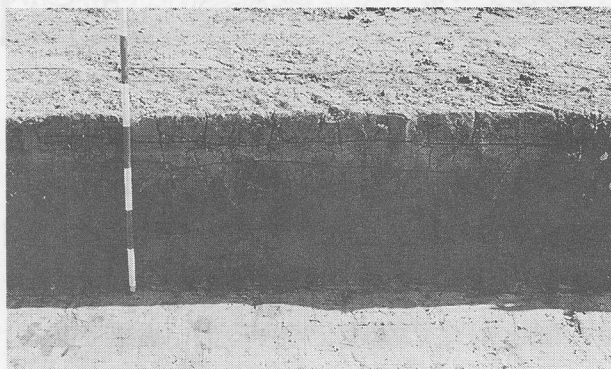
所在地 加茂市大字下条地内

調査面積 約305㎡

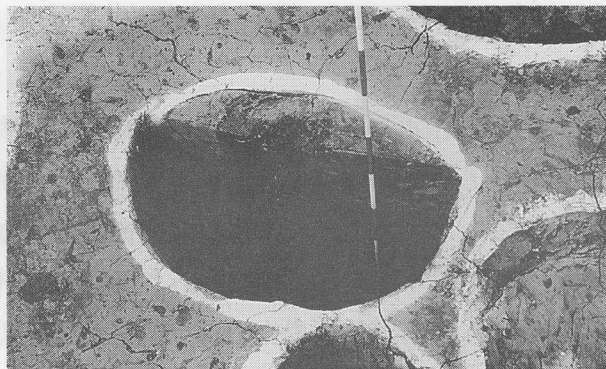
調査期間 平成19年9月6日～10月1日

調査原因 吉津川地区県営ほ場整備事業

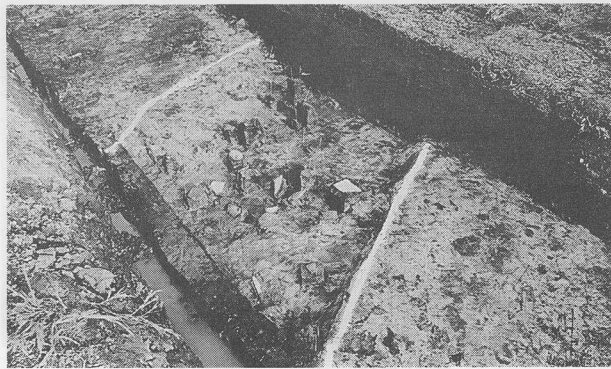
調査の概要 調査区は上幅2mほどの細長い調査区を対象としていた。概ね現水田面下約0.5m程の比較的浅いところから遺構・遺物が出土した。調査区中央部付近を頂きにした馬の背状の旧地形があり、安定した立地条件下で夥しい遺構が検出された。明確な形ではないが、柱根の出土から掘立柱建物跡の存在は確実である。他に、溝、土坑、ピットなどが重複する形で多数検出された。遺物も多量で、平安時代の土師器、須恵器が中心である。中には墨書土器が数点見られる。特殊遺物としては、ガラス丸玉1点がある。官衙関連遺跡の馬越遺跡とは1kmの距離にあり、関連性が注目される。



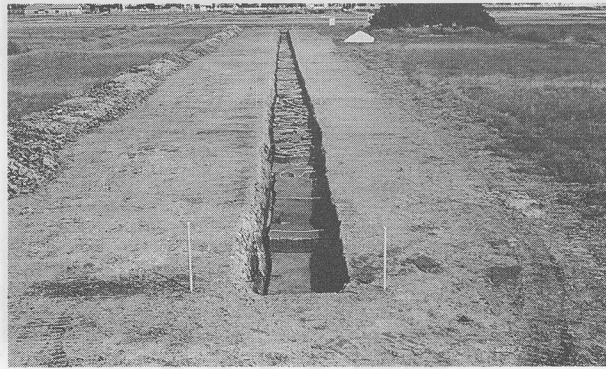
太田遺跡 土層断面



太田遺跡 柱根



太田遺跡 溝



太田遺跡 完掘状況

2. 開発に伴う市内遺跡試掘・確認調査

信濃川下流災害復旧等関連緊急事業に伴い山島新田地内及び五反田地内を対象とし、合計約160㎡と宅地造成工事に伴い上条地区の舞台遺跡周辺地で約43㎡の試掘調査4件を実施したが、遺構、遺物ともに確認されなかった。

編集後記

「民俗資料館だより」の発行は本号で15号になりました。偏に多くの人達のご後援の賜物と感謝いたしております。今後とも、御指導・御鞭撻をお願いいたします。本号の発行に当たり、お忙しい中、玉稿をお寄せいただいた関正平氏（加茂市文化財調査審議会委員）に深く感謝します。